

日本の読者の皆さんへ

本書は、二〇一六年にソウル大学校出版文化院から刊行された『基地国家の誕生——日本が戦った韓国戦争（기지국가의 탄생…일본이 치른 한국전쟁）』の日本語版翻訳書です。これは二〇〇〇年に東京大学へ提出した私の博士学位論文「朝鮮戦争と日本——『基地国家』に戦争と平和を」をベースとしたものでした。日本語で書かれた学位論文をまず韓国語で出版し、それをもう一度日本語に訳し直して翻訳することになったわけです。本書の日本語版出版により、「朝鮮戦争と日本」という主題を韓国人と日本人が共に考え、ここで発生した不条理な現実を克服するために両国民が協力しなければならないという、私の永らくの問題意識をようやく充分に伝えられるようになりました。そのような機会が得られたことについて、誠に喜ばしく思います。

とりわけ本書が、朝鮮戦争の停戦から七〇年となる二〇二三年に日本で出版されることについて、特別な感慨深いものがあります。朝鮮戦争という問題が、そしてそれが停戦の形で続くことの問題が、朝鮮半島に限られた問題ではなく、日本にも重要な意味を持つということを確認させてくれるからです。それは、この本で私が皆さんに伝えようとした主張の一つです。

一方、三年にわたって戦われた戦争を、七〇年が過ぎても終わらせることのできない現実、どう見ても正常ではありません。それでもロシア—ウクライナ戦争の長期化を背景として、停戦七〇年を肯定的に再認識する雰囲気があることについては、非常に大きな違和感を覚えます。さらに、朝鮮半島の休戦体制を終わ

らせようとの努力に対する嘲りが日本に蔓延した現実、休戦体制の強化と力による平和が声高に叫ばれる現実については、危機感すら覚えます。これは、日本で朝鮮戦争の抽象化が憂慮されるレベルで進んだためではないかと思われます。朝鮮戦争が日本人に関係のない戦争ではなかったことを日本人が理解するならば、永らくの停戦状態の中で平和体制構築への想像力を取り除かれた現実が何を意味するのかも、日本人が理解できるものと期待しています。

そうした期待感の裏で、複雑な思いが込み上げるのを感じます。これは博士学位論文を韓国で出版した、二〇一六年にも感じた思いです。当時、変化への期待を込めて学位論文で扱った現実は、とうとう安保法制の通過という現実を通じて、より堅固な姿を露わにしていました。それからさらに七年が過ぎ、日本語の翻訳書を出版することになった今、日本で安保関連三文書が改訂され、ロシアと中国、北朝鮮の脅威に対する日米韓の安保協力が、これまでになく強調されています。こうした現実を「新冷戦」と表現する記事と研究にたびたび接しています。しかし、そうした冷戦の現実は、少なくとも東北アジアではそれほど新しいものでも、冷たいものでもありません。あえて表現するならば、それは「新冷戦」の到来と言うよりは、この地域で一度たりとも解体されたことのない「戦争体制」の復活・強化にほかなりません。

二〇二三年における東北アジア安保の現実は、朝鮮戦争に起源を持つ秩序の耐久性を荒々しく露わにしています。そのような現実において、二〇〇〇年に完成した学位論文が二〇二三年に依然として出版の意義を持つとしたら、二一世紀の始まる時点で論文に込めようとした変化への希望が、二一世紀をほぼ四半世紀が過ぎようという時点においてすら望むべくもなかったことを意味するのであり、この翻訳書の出版を喜んでばかりはいられません。本書が現実に対する説明力を失う時にこそ、本書はその意義を全うすることができます。

るからです。ですから、日本の読者の皆さんに出会う喜びと複雑な思いが、絡み合っているのです。

日韓関係も、このような現実を反映するかのように混沌としています。植民地支配の問題をめぐる根本的な問題提起と、これを封印しようとする動きが、日本と韓国の境界を行き交いながら対立し、葛藤を来たしていることが、日韓関係の基調を成しています。しかし、その根本には、朝鮮戦争を契機に作られた地域秩序と、それに応じて形成された韓国と日本の間の独特な関係、そしてそれに対する両国指導者と国民の認識不足が、広く深く根差しているようです。これが日韓の和解と東北アジアにおける平和の想像力を遮断し、葛藤と紛争の現実を固着させ、強化させています。

「朝鮮戦争と日本」という二つの概念の組み合わせは、韓国人にとっては馴染みがなく、理解しがたい組み合わせであり、日本人にとってはきまりが悪く、退けたい組み合わせです。互いが互いを不可欠な一部として内包しているにもかかわらず、これら結びつけて考える枠は、日韓両国において簡単には常識化されずにあります。その結果、こうした現実が東北アジアの現在をまともには理解するうえでの障害となっています。「朝鮮戦争と日本」という組み合わせは、歪められたままに常識となった東北アジアの歴史像を復元して正す「相互に規定し合う関係の概念群」です。

朝鮮戦争——その起源と原因と展開と結果——に日本は決定的な意味を帯びていました。日本抜きに朝鮮戦争を充分に理解することはできません。それゆえに、朝鮮戦争において遂行された日本の役割を充分に評価すること抜きに、停戦体制を終息させることはできません。同様に戦後日本——その誕生と変容——に朝鮮戦争は決定的な意味を帯びていました。朝鮮戦争抜きに戦後日本を充分に理解することはできません。さらに言えば、戦後日本の移り変わりにおいて朝鮮戦争の持つ意味を充分に理解すること抜きに、戦後日本を

総括することはできないのです。

それにもかかわらず、朝鮮戦争休戦体制の克服を主張する側では、朝鮮戦争において日本が遂行した役割と存在を無視しており、日本の戦後総決算を主張する側では、朝鮮戦争が日本の戦後史に及ぼした影響を無視しています。両者ともに歴史的事実に目を閉ざしたまま、問題解決に至る要所を努めて無視し、互いを敵対視しているのです。

朝鮮半島平和プロセスが日本の戦後総決算を、日本の戦後総決算が朝鮮半島平和プロセスを相互に規定する構造を理解すること抜きには、朝鮮半島平和プロセスも日本の戦後総決算も個別に成功することはなく、東北アジアにおける対立と葛藤の秩序を克服して平和と繁栄の新たな秩序を築くことは不可能です。

そこで、日本人には朝鮮半島の戦争と休戦という問題が、韓国人には朝鮮戦争に関与した日本という問題が、互いの平和的生存と繁栄のために必ず解かれなければならない宿題として残されていることを確認しなければなりません。韓国では朝鮮半島平和プロセスの中断以降、おぼろげにであれ、これに関する理解が進んでいるようです。しかし、日本においては、依然としてこれに対する理解が充分ではないように思います。今からでも本書がこうした現実を知らせ、これを克服するための努力を促しうるのであれば、今回の翻訳書出版は複雑な思いを乗り越えて、この上なく純粋な喜びとなるでしょう。

そのような意味で、二〇一六年度の韓国語版の翻訳出版を提案してくださった東京堂出版の小代涉氏、そして翻訳の労を惜しむことのなかった市村繁和氏に、言葉にしがたい深い感謝の気持ちを覚えます。お二人の努力抜きには、本書は陽の目を見ることはありませんでした。そうした貴重な機会をくださったにもかかわらず、私の怠け心から本書の出版はそもその計画から遅れることとなりました。その遅れた時間に、私

はお二人の細かな作業を通じて自分の本を学び直す経験を持つこととなりました。編集者の小代氏は、外国人研究者としては深く理解することのできなかつた脈略を掘り下げてくださり、とりわけ日本現代史の常識にそぐわない部分を細かに指摘してくださいました。翻訳者である市村氏は、日本語原資料をもう一度細かにチェックしながら、曖昧に処理してきてしまった部分を正確な情報で補完してください、一部引用の誤った箇所を探し出して校正してくださいました。またお二人の指摘を通して、大きく意味を分析せずに著述した部分が実は重要な中身を持っていたり、私なりの解釈を施したりした部分が実は前後の脈略を誤って理解した結果であるということを知ることになりました。そのおかげで原資料を読み直し、事実関係を確認し、修正する時間を持ち、その過程で削除と補完などの内容調整も必要になりました。翻訳書において補論を付け加えた以外に大きな付け足しはなかつたとしても、お二人のおかげで完成度が非常に高まつたことは間違いないと思います。それでも依然として問題が残っているかもしれないと思いますが、これについては、全面的に著者である私の責任であることを明らかにしておきたいと思えます。

二〇二三年八月 東京にて

南基正

はじめに

本書は、筆者が東京大学に提出した博士学位論文「朝鮮戦争と日本——基地国家の戦争と平和」をもとにして、これを翻訳しつつ大幅に修正・補完して発展させたものである。学位論文を提出したのが二〇〇〇年の夏だったから、それから一六年経っての出版である。出版がこれほどまでに遅れたのは純粹に怠け心のせいであるが、本書の扱う内容が時宜性を失わないままに状況が展開しているのは、さまざまな意味で逆説的である。本書の内容が依然として現在展開されている現実を把握するための分析力を持つとしたら、本書が克服の課題と設定した現実が一六年間変化しなかったためだろう。

むしろ二〇〇〇年以降に日本で起こった変化は、学位論文で設定した問題の本質を一層はつきりと見せてくれている。それは、ともすれば学位論文を構想しながら提起した問題が、「戦後日本」の総体としての性格規定と関連したものであり、最近の劇的な変化を含めた二〇〇〇年以降の変化は、「戦後日本」に対して日本人みずからが総体としての問題提起をしつつ起こったものであるからだ。こうした変化を目のあたりにしながら、学位論文で展開した基本的な考えをこの間に再構成した。これを数次にわたって発表しながら、およそ整理されていなかった考えを発展させてきた。本書には学位論文提出以降に展開された論考も含まれている。

「戦後日本」についての関心の始まりは、唐突に聞こえるかもしれないが「解放三年史」についての関心にあった。解放直後の米韓関係を学んでいた学部生にとって、それは変化球のイメージで迫ってきた。本書

を書くことになった起源を遡ってみたところ、米国の投げた変化球のイメージに辿り着いた。

研究者になろうと決心したのは、復学して学部で四回生をしていたある日のことだった。学科の行事でシンポジウムを準備する集まりに参加して、セミナーを繰り返していた頃のことだ。シンポジウムの主題は「米軍政期における米国の対韓政策」だった。一九八〇年代中盤の民主化運動が盛り上がりを見せた頃、「米軍政」の「解放三年史」が大いに注目されていた。分断と戦争へと続く韓国現代史の桎梏が米軍政期における米国の対韓政策に起因するとの思いが、その背景に根差していた。シンポジウムはそのような大きな流れを反映していた。シンポジウムが終わったあとに数次のセミナーを行ったにもかかわらず、何がわかったのかよくわからないという苛立ちに襲われた。しかしながら、何もわからないという絶望よりも、何がわかったような希望が生まれた。大学院という選択肢が具体的に迫ってきた。

大学院に入ると「解放三年史」研究は時空間を拡大し、新たな研究領域を生み出していた。一方では、朝鮮戦争を視野に収めた「解放八年史」研究へと時間的な延長を、他方では、朝鮮半島を越えた「東アジア」研究へと空間的な拡張を試みていた。その時、初めて変化球が見え始めたのである。米国の対韓政策には直球だけがあったのではなかった。この時期の米韓関係には、二つの頂点を結ぶ直線だけではなく、日本を間に挟んで作られる三角形から理解される部分が相当に大きな位置を占めていた。改めて野球にたとえて言うならば、米国の対韓政策は日本を中心に形成される東アジア政策を経て、多様な角度に変化して入ってきていた。そのような変化球の軌跡を辿りつつ、米国による韓国占領と日本占領を比較する内容をテーマに修士論文を完成させた。日本に留学し、朝鮮戦争期に展開した日本の総体的な変化を博士論文のテーマとするこ

とになったのは、今から考えてみると自然な展開だった。それは「平和国家」という「戦後日本」の国家的

アイデンティティに触れる作業となったのである。

日本に留学した一九九一年四月、日本は湾岸戦争の後始末のために掃海部隊をペルシャ湾に派遣する問題で加勢していた。日本に到着するや否や、もう少しで東京に桜が満開となる頃に湾岸戦争は終息し、四月末に五隻の掃海艇と一隻の補給艦で構成された「ペルシャ湾掃海派遣部隊」が、横須賀・呉・佐世保などの港から出航した。これら自衛隊の掃海部隊は、六月五日から九月一日まで九九日間、ペルシャ湾において米国ならびにその他の多国籍軍掃海部隊とともに掃海作業を遂行した。これは自衛隊の初めての海外派遣任務だった。日本の掃海部隊がペルシャ湾で任務を開始する頃、「海外派遣 日本特別掃海隊」というタイトルの特集記事が『朝日新聞』夕刊に連載された。掃海部隊の派遣が、実は朝鮮戦争の時期にも行われたことがあるとの内容だった。その事実がずっと隠されたまま公に論じられないのは、それが憲法違反の可能性があるためであり、したがって当時行われていた掃海部隊のペルシャ湾派遣も、憲法違反だとの批判を含んだ記事だった。これを契機に、朝鮮戦争に日本がどのように関与していたのかを探り始めた。そしてそれは「後方基地」日本の姿を確認する作業の出発だった。「後方基地」日本は、「平和国家」日本の隠された現実だったのである。

「平和国家」の自負とそれを恥じる思い。留学時代、この二つの矛盾した感情の中で惑う、ある日本人との対話は、みずからの国家を「平和国家」と認識する日本人一般の深層心理を垣間見せてくれた。時は米国で起こったロサンゼルス暴動で騒がしかった頃だったから、一九九二年の春の終わりから初夏にかけてのことだ。日本の新聞とテレビでもこの事件は大きく取り扱われ、その中でロサンゼルスのコリアン・タウンでの暴動とこれに立ち向かう韓国人らの姿が、クローズアップされて報道されていた。その頃、ある日本人

が話しかけてきた。あなたも銃を使ったことがあるのか、韓国人たちは大したものだ、日本はもはや戦争をしないことにしたから軍隊がなくなったのに、韓国はいまだに軍隊というものがあるのか、と。そしてこう独り言を呟いて背を向けたのだった。「日本は平和国家だから」。その瞬間、彼の顔には軽蔑と羨望が適度に混じりあった、妙な微笑みが差した。そうした会話はそれ以降も、日本人たちとの出会いの中で経験することとなった。文明国家の先頭に立って軍隊を持たないことを誓った自負心。しかし、いざ危機が差し迫ると、よその軍隊に頼らなければならないというやるせなさ。その配合の割合は人によって異なったものの、大部分の日本人はこの二つの矛盾した気持ちを同時に持っていた。

「朝鮮戦争と日本」を主題に資料を収集しながら問題意識を整理する間、日本では昨今の集団的自衛権行使の容認へと続く、安保論争の種火がともっていた。その論議は朝鮮半島との繋がりの中でもなされた。一九九四年三月、南北実務接触において北側代表の朴英洙パク・ヨンソが「火の海」発言で戦争の危機を高めて第一次核危機が高まる中で、米国は寧辺ニョンピョンの核施設への攻撃を検討していた。朝鮮半島はぎりぎり戦争の危機を免れたが、現実化する朝鮮半島の緊急事態を背景に、日本では安保政策の転換が検討されていた。一九九三年に出版された小沢一郎の著書『日本改造計画』を契機として、日本は「普通の国」にならなければならないという主張が提起・展開されたのは、朝鮮半島の緊急事態に備えた体制づくりの意味を持っていた。

日本が戦後五〇年を迎えた一九九五年は、阪神・淡路大震災の衝撃で始まった。続く三月にはオウム真理教の信者たちが起こした地下鉄サリン事件により、防災と治安をめぐる日本の脆弱なリーダーシップと国家システムが組上に載せられた。これに批判的な人々は、問題を「平和国家」の限界に求めた。一九九五年上半期に起こったことだ。一九九五年九月には、沖縄で米海兵隊による少女暴行事件が発生し、沖縄全体が動

揺っていた。沖縄に集中した米軍基地が日本の平和を支えている現実を暴き出し、沖縄の住民は「平和国家」の偽善を告発していた。一九九五年、日本では「平和国家」の限界と偽善が同時に現れていたのである。こうした現実には直面して、一方では「平和国家」の失敗を指摘し、他方では「平和国家」の完成を要求していた。

しかし、「後方基地」の問題に頭を悩ませていた筆者にとって、問題の本質はより深いところにあるように見えた。「基地によって支えられる平和」の国家を「平和国家」と呼びうるのが疑問だったからだ。朝鮮戦争期の日本の実態を露わにしてくれる膨大な量の資料の中で出口を探し出せずに彷徨っていた時、「平和国家」を「基地国家」に呼び変えれば、より多くの事実を説明しうるという思いに至った。遅まきであれ幸いなことだった。朝鮮戦争期に米軍の日本占領当局が遺したGHQ文書と、日本の外務省資料などを読み解きながら、積み上げられた無機質の情報が「基地国家」という概念の中に収まり、有機的な実体へと変化する思いがした。

以上、長い時間をかけて吟味した問題意識をもとに、本書は戦後日本が朝鮮戦争を行いながら「基地国家」として生まれ変わる過程を追跡していく。全体構成は、問題提起にあたる序章と、要約ならびに結論を示す終章、そして本論からなっている。

第一章では、朝鮮戦争の直前、冷戦の前線として浮かび上がった日本の国際政治的な位相を点検した。これを通じて朝鮮戦争が、東北アジア次元で展開された米ソ間の駆け引きが日本に拡大される過程で勃発したという事実と、そして朝鮮戦争が米中戦争に転化する前、東北アジアでは日中戦争の対立構造が復活していたという事実を確認できるだろう。

第二章と第三章では、朝鮮戦争において「戦闘基地」かつ「生産基地」の役割を付与され、これを遂行した日本が、講和を通じて「基地国家」として独立するありさまを分析した。「基地国家」は「国防のための兵力として軍隊を保有せず、同盟国の安保の要衝において基地の役割を果たすことで集団安全保障の義務を履行し、これによって安全保障の問題を解決する国家」を指し示す概念として使われるだろう。

第四章では、朝鮮戦争の期間に日本が国連に対して遂行した協力が、短期的には早期講和の実現を目標として据えたものだったが、最終的には講和以降の国際舞台における発言力の獲得を狙ったものだったことを確認した。

第五章と第六章では、「基地国家」に変貌していく日本の現実に反発する、左右の動きを分析した。朝鮮戦争が勃発すると、戦前右翼および旧軍人らによる再軍備への動きが組織化された。彼らは朝鮮戦争の勃発が大日本帝国の復活の機会になるものと捉え、「基地国家」を解体し、正規軍を保有する「国防国家」の創出を目標に動いていた。他方、日本共産党は朝鮮戦争の後方基地日本で「基地国家」化に抵抗し、絶望的な対米武装闘争を展開していた。在日本朝鮮人連盟の解散後、非合法活動以外の活動空間を持ちえなかった在日朝鮮人たちは、こうした日本共産党の方向転換を喜んで受け入れ、闘争の先頭に立った。

第七章と第八章では、朝鮮戦争の現実に対する日本の知識人と国民の反応を分析した。「戦後知識人」たちは朝鮮戦争の現実を目前にして発表した「平和問題談話会」の「第三声明」を通じて、「戦後平和主義」の理念的・理論的基礎を提供した。一方、敏感に朝鮮戦争の現実を受け止めていた日本国民は、「軽武装・基地提供の日米安保」に要約される、吉田茂内閣の現実主義的な安保政策を支持していた。大多数の国民は「国防国家」ならびに「武装闘争」を拒否しており、「基地国家」を現実として容認していた。

終章では本論の要約に加え、現在の日本を理解するうえで本書が持つ含意を示しておいた。先に指摘した通り、日本で「普通の国」化の議論が台頭した一九九〇年代は、地球的レベルで冷戦体制が崩壊する背後で、「朝鮮半島有事」に象徴される休戦体制が前面に浮上し始めた時点だった。これとともに「朝鮮半島有事」と繋がった日本の「基地国家」的属性が露わになり始めた。日本の改憲論議とその中間段階としての集団的自衛権論争は、こうした「不都合な真実」との直面という意味を帯びるものである。

大学院への進学以来、本書が出るまで、教えをいただき助力を与えてくださった多くの方がたに感謝の気持ちをお伝えしたい。ソウル大学校外交学科大学院で韓国外交史に関する河英善先生ハ・ヨンソンの授業を履修し、硕士学位論文を構成することになり、そこで一生の課題である主題の基本的な方向が設定された。東京大学に留学することができたのは、渡辺昭夫先生が受け入れてくださったからだ。研究生となって一年目に博士課程に進学できたのは、筆者の研究テーマについて和田春樹先生が興味を持ってくださったからである。博士課程に合格した日、和田先生にいただいた電話をいまだに覚えている。和田先生は研究者の典範であり人生の師表として、今でも多くの教えを賜っている。和田先生が定年退職をされてからは、石井明先生の援助のおかげで学位を受けることができた。石井先生はどんな話であれ、辛抱強く最後まで聞いてくださる方だった。ソウル大学校政治学科の名誉教授である張達重先生チン・ダクジュンは、筆者が東北大学に職を得るうえで決定的なサポートをしてくださった。

ソウル大学校外交学科の先輩である李元徳先生イ・ウォンデクは、未熟な留学生時代に上下の家に住む間柄として過ごし、生活と学業の両面で大いに助けてくださった。論文作成の過程においても、行き詰まるたびに李元徳先生のお宅へ相談に伺い、その都度適切な指導で方向づけてくださった。李元徳先生は、筆者が国民大学校に在職

していた折には先輩教授として韓国における教授生活を開始し定着させるうえで、大いに助けてくださった。同じく外交学科の先輩である全鎮浩先生は、日本留学時代に隣町に住むよしみから、筆者をよく食事の席に招待していただき、外国生活ゆえの辛さを慰めてくださった。また、韓国政治の現実の中で、論文の意義を確認して、助言してくださった。外交学科の同期である梁基雄翰林大学校教授は、ご本人の学位論文作成で忙しかったにもかかわらず、筆者が学位論文の方向性を捉えていく過程で具体的な現実との緊張感を失わぬよう助言してくださった。今は故人となった徐東晩先生は、和田春樹ゼミの先輩として現実の展開を社会科学的に分析する力が与えてくれる感動を悟らせてくださった。和田春樹ゼミのもう一人の同門である李雄賢先生は、研究の重みが「真の研究」に対する無限のこだわりから生まれることを教えてくださった。東北大学在職時に出会った空井護・現北海道大学教授、牧原出・現東京大学教授との語らいは、日本政治に対する理解を深めてくれた。国民大学校名誉教授の金榮作先生と韓相一先生は、筆者が帰国して国民大学校に赴任して以来、常に温かい関心と激励の言葉で、しばらくの間、幼い後輩教授に勇気を与えてくださった。

「戦後日本」を批判的に検討する本書は、日本の国費外国人留学生制度を利用して、その基礎が作られた。文部科学省の奨学金支給が完了した学位論文の終盤には、渥美国際交流財団の奨学金で延命することができた。渥美財団では学位論文を本にする最後の過程で、改めてお世話になった。二〇一五年の夏、軽井沢にある渥美財団の別荘で二週間の塾居生活をして、原稿を完成させた。財団の今西淳子常務理事に深く感謝の気持ちを伝えたい。

本書の原稿が完成した二〇一五年は、韓国と日本で解放と終戦七〇年、日韓修好五〇年の年だった。この

先、二〇一五年は日本において安保法制元年として記録されるだろう。二〇一五年七月一日、日本の衆議院平和安全法制特別委員会で「安保法制」が強行採決された日の夜、本書の最終原稿を脱稿した。偶然の一致としても恐れ入ったタイミングだ。このようにいくつかの意味において永らく記憶されるであろう二〇一五年に本書の最終原稿をまとめることができたことを幸いに思い、東北アジアの平和に寄与する日韓関係の新たな進歩のための、一つの指針とすることができればありがたい。

本書が出るまでに家族の応援が大きな支えとなった。妻・趙貞瑗チョウウジンウオンは、本書の構成が臆げに摺れた日から今日まで、常に傍で静かに応援してくれた。留学初年度の一九九一年秋に結婚し、その頃に論文の主題が確定したのだから、本書は二五年の結婚生活の成果でもある。最初の構想が書籍の姿となる間に、二人の子供が生まれ、長女・和延フヤヨンは大学生になり、次女・周延ジュヨンは中学生になった。妻と二人の娘は私の人生の原動力であり、そのような意味で本書を作り出した影の立役者だ。この間の応援に深く感謝の気持ちを伝えたい。そして誰よりも本の出版を指折り数えて待ってくださった父と母に、本書を捧げたい。

最後に本書の出版を決定してくださった、ソウル大学出版文化院の出版委員会と権錫萬クワンシクマン院長に感謝を捧げたい。常に忙しいスケジュールに追われて協調が取れなかったにもかかわらず、発行日を前倒しにしてほしいという無理な要求を受け入れ、丁寧な校正作業を務めてくださった鄭成淑チンソンシク先生にも深い感謝を捧げたい。

二〇一六年四月二三日

冠岳山の麓の研究室にて

南基正

目次

日本の読者の皆さんへ

はじめに

凡例

序章 「日本」 基地国家」 論の提起

第一節 平和国家の理想と現実

1 「平和国家」の理想／2 「基地国家」の現実

第二節 基地国家論の提起

1 「基地国家」の定義／2 「基地国家」の矛盾

第三節 先行研究・資料・本書の構成

1 先行研究／2 資料／3 本書の構成

第一章 朝鮮戦争直前、東アジア冷戦の中の日本——冷戦の前線

第一節 ソ連と日本共産党

1 コミンフォルムの日本共産党批判再考／2 「極東コミンフォルム」問題をめぐって

第二節 中国共産党と日本

1 日本の再起と朝鮮戦争介入の可能性／2 台湾の旧日本軍——「白団」

第三節 米国と日本、そして韓国

1 米国の日本防衛戦略／2 吉田茂の戦後国家構想

第四節 北朝鮮の日本認識ならびに朝鮮戦争の開戦決定と日本ファクター

1 北朝鮮の日本認識／2 朝鮮戦争の開戦決定と日本という要因

第二章 朝鮮戦争の勃発と日本——「基地国家」の誕生

第一節 開戦と在日米軍の出勤

1 開戦直前の在日米軍の編成／2 在日米軍の出勤／3 基地化の実相／4 朝鮮戦争と沖縄

第二節 戦闘基地の現実

111

1 出撃起点としての前進基地／2 兵士と物資輸送の中継基地／3 物資補給と訓練、休養のための後方基地

第三節 在日米軍基地の意味

129

1 兵站基地の軍事戦略的位置／2 後方支援の要塞

第三章 特別需要の発生——「生産基地」日本

145

第一節 朝鮮特需の発生

145

1 「朝鮮特需」の性格論争／2 「特需」の定義／3 「朝鮮特需」の内容

第二節 武器産業の復活

155

1 武器関連契約の発生／2 財界の動き／3 武器生産の再開／4 武器特需の効果

第三節 基地経済と対日講和

162

1 基地経済の意味／2 対日講和と財界の「朝鮮特需」認識／3 「基地経済」の終息と対米外交

第四章 日本の戦争協力——「基地国家」の戦争と外交

第一節 日本特別掃海部隊の派遣

第二節 日本人労働者の動員

1 物資輸送作戦の最前線で／2 後方医療支援の最前線で

第三節 日本人参戦論争

1 戦争に巻き込まれた日本人たち／2 在日韓国人の参戦

第四節 基地国家の外交

1 日本政府の立場と国連に対する協力／2 戦争協力外交の最終目的

第五章 再武装論の登場——「普通の国」論の源流

245

第一節 朝鮮戦争の勃発と戦前右翼および旧軍人の再登場

245

1 戦争勃発直後の米軍の情報収集と戦前右翼および旧軍人／2 戦前右翼および旧軍人の追放解除

第二節 戦前右翼の再結集と戦後右翼の形成

255

第三節 右翼運動の本格化と自主国防論の登場

263

第四節 保守政治家と社会主義者の再軍備論

275

第六章 武装闘争の失敗——「基地国家」における革命と戦争

285

第一節 日本共産党と朝鮮戦争

285

1 コミンフォルム批判の衝撃／2 朝鮮戦争の勃発と日本共産党

第二節 朝鮮戦争の勃発と在日朝鮮人運動

295

1 朝連解散以降の在日朝鮮人運動／2 朝鮮戦争勃発と在日朝鮮人

第三節 武装闘争の前衛、在日朝鮮人運動

1 「祖国防衛」と「日本革命」の狭間で／2 日本共産党の軍事路線と在日朝鮮人運動

第四節 停戦会談の展開と在日朝鮮人運動

1 「白水峯論文」と在日朝鮮人運動の路線転換／2 休戦協定の成立と在日朝鮮人

第七章 「戦後平和主義」——「基地国家」における平和論

第一節 平和問題談話会の結成

1 「戦後知識人」の時代／2 平和問題談話会と「戦後平和主義」／3 平和問題談話会の結成

第二節 戦後平和主義の定式化

1 「ユネスコ声明」についての討議／2 平和問題談話会の声明と絶対平和主義

第三節 朝鮮戦争の影響と意図された欠陥

1 「第三声明」と朝鮮戦争の影響／2 意図された欠陥／3 「戦後平和主義」の司祭——
丸山眞男

第八章 朝鮮戦争の勃発と日本国民——「基地国家」の選択

第一節 新聞の論調と避戦の思想 371

第二節 朝鮮戦争の勃発と世論 383

第三節 講和問題と世論 389

第四節 基地国家としての独立 393

終章 「基地国家」の誕生とその含意

第一節 要約 401

1 東アジア冷戦における日本の位置／2 「基地国家」の戦争／3 「基地国家」解体の試み——「国防国家」の再建と「武装闘争」の実践／4 「基地国家」の平和

第二節 現在における含意

1 二〇一二年冬から二〇一三年夏へ／2 『コクリコ坂から』——「戦後史」の隠喩／3
戦後の戦争 (post-war wars) と「基地国家」日本／4 「基地国家」から「普通の国」
へ——「憲法改正」の行方／5 東アジアの問題としての日本の「普通の国」化

補論 朝鮮半島休戦体制解体の中の「基地国家」日本

431

朝鮮半島休戦体制の耐性と日本／朝鮮半島危機の構造、休戦の実体／朝鮮半島平和プロ
セスの経緯／朝鮮半島平和プロセスと日韓関係／蚊帳の外からの安倍外交／韓国の政権
交代と休戦体制の強化／極東一九〇五年体制、日韓一九六五年体制、朝鮮半島休戦体制
／キャンブ・デービッド首脳会談の思想、結果、展望／補完し合う朝鮮半島休戦体制と
基地国家の耐性

訳者あとがき

事項索引

人名索引

477 471 457